

○都内の人的・物的被害の状況

- ・人的被害 死者1名、負傷者11名
- ・住家被害 床上浸水816棟、床下浸水706棟、合計1,522棟

出典：令和元年台風第19号に係る被害状況142報（東京都総務局）

○都内の河川被害の状況

- ・都管理河川では、以下の7河川で溢水しました。
（秋川、浅川、南浅川、成木川、谷沢川、奈良橋川、柳瀬川）
- ・国管理河川では多摩川が二子玉川付近で溢水しました。

○都内の内水被害の状況

- ・多摩川の水位上昇による影響等により、大田区田園調布や世田谷区上野毛等で内水氾濫等が発生しました。

4-2 施設の整備効果

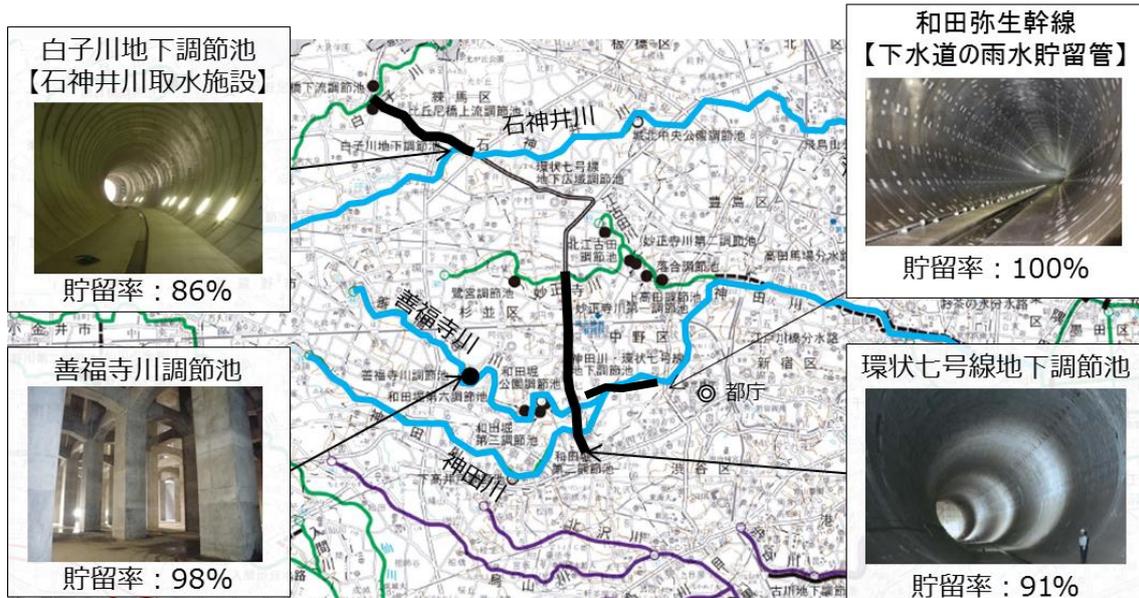
令和元年台風第 19 号では都内でも記録的な降雨となり、区部西部では総雨量約 300 ミリ、多摩地域では約 600 ミリの降雨を記録しましたが、これまで整備した施設が浸水被害の軽減に一定の効果を発揮しました。

○令和元年台風第 19 号における施設の稼働状況

中小河川で整備を進めている調節池では、供用中の 28 調節池のうち過去最多となる 21 調節池で洪水を取水し、浸水被害の軽減に大きな効果を発揮しました。

また、区部下水道には約 60 万 m^3 の貯留施設があり、貯留率は約 6 割に達しました。都内最大級の貯留施設である「和田弥生幹線」は貯留率 100%となり、周辺の浸水被害の軽減に大きな効果を発揮しました。

<効果を発揮した主な調整池等>



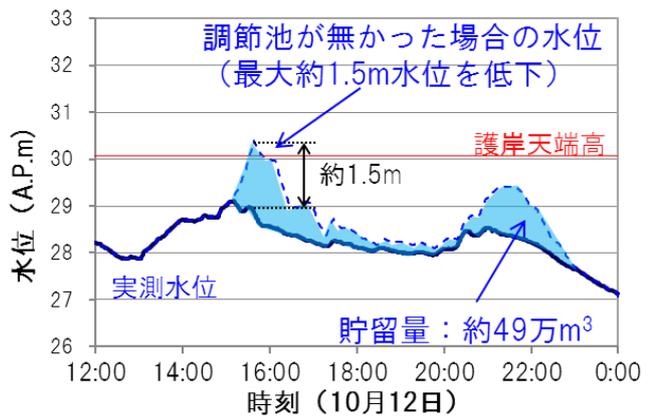
○神田川・環状七号線地下調節池

「神田川・環状七号線地下調節池」では、神田川、善福寺川より洪水を取水し、総容量の9割の約49万 m^3 を貯留しました。「神田川・環状七号線地下調節池」での取水によって、調節地の下流地点で最大約1.5mの水位低下効果があったと推測されます。

もし調節池が無かった場合、ピーク時には氾濫水位を超過していた可能性もあり、調節池への取水によって溢水を防いだといえます。



流入状況

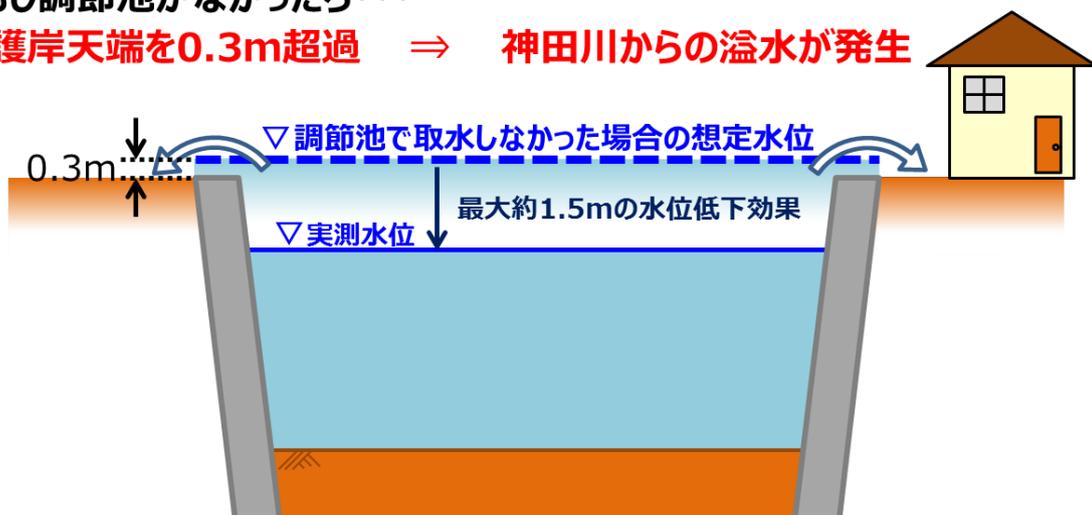


神田川の水位状況グラフ

<神田川の水位断面イメージ>

もし調節池がなかったら・・・

護岸天端を0.3m超過 ⇒ 神田川からの溢水が発生



○雨水貯留施設・雨水ポンプ施設

区部における下水道には 56 か所・総貯留量約 60 万 m^3 の雨水貯留施設と 70 か所・総排水量毎分約 11 万 m^3 の雨水ポンプ施設があります。

雨水貯留施設の貯留率は約 6 割に達し、8 か所の貯留施設がほぼ満水となりました。また、雨水ポンプ稼働率は約 5 割に達し、浸水被害の軽減に大きな効果を発揮しました。

貯留容量約 60 万 m^3 は、25mプール約 2,000 杯分の雨水を貯留する能力があり、排水能力毎分約 11 万 m^3 は、1 分間に 25mプール 360 杯分の雨水を排除する能力があります。

【主な満杯の貯留施設】

- ・和田弥生幹線：容量 15 万 m^3 （杉並区・中野区）
- ・谷端川一号幹線：容量 3 万 2 千 m^3 （豊島区）
- ・第二十二社幹線：容量 1 万 3 千 7 百 m^3 （渋谷区）

<下水道の雨水貯留施設と雨水ポンプ施設>

